

うちなーの神様

小林郁文望

沖縄には神様のお赦しがないと行けないと言われる島がある。太陽が昇る方向にある島、うちなーんちゅ（沖縄の人）から神の島と呼ばれる島、久高島だ。琉球の創世神アマミキヨが天からこの島に降りてきて国づくりを始めたという、琉球神話聖地の島。また久高島は海の彼方の異界ニライカナイにつながる聖地であり、穀物がニライカナイからもたらされたといわれている。神の島、五穀豊穡の島といわれる所以だ。

お赦しがないと行けないと言っても、実際、久高島へ行く船は一日に何本も運行しているし、それに乗りさえすればいつでも久高島へ行ける。しかし、うちなーんちゅによると、久高島に呼ばれていない限りは、行こうとしても行けないらしい。波が高くて船が欠航したり、なぜか突然予定が入って行けなくなったり……県外に住む人にとっては、信じられない話かもしれないが、沖縄に住んでいた私は全く違和感なく納得できる。沖縄で生活していると、そういう論理的に説明できないことを受け入れるのが、ごく当たり前のようない気になるから。

私は二回久高島を訪れた。一回目は全く自分の意思と関係ない訪問だった。沖縄本島に住んでいた当時、東京から訪ねてきた父親がとても行きたがったのだ。私自身は久高島に行きたいという想いはそこまで強くなく、沖縄に住み始めてから、かの島を訪ねる機会は少なくとも一回はあったのだが、その機会を活かすことはなかった。父親と母親と、なぜか一緒についてきた叔父とともに久高島を訪れた時、私はとても悩んでいた。今振り返ってみても、当時の記憶はどこどころ曖昧で、久高島の景色も妙に靄がかかって記憶されている。正直なところ、特に美しい島だとも神聖な島だとも感じなかった。それどころではなかった。一生懸命思い出そうとしても、野外に置かれたケージの中に飼育されていた数匹の蛇、バスで案内してくれたおじさん、一月だというのにわざわざもって来たシュノーケル一式を装着し、ひとり海に入っていった叔父……それくらいしか浮かんでこない。今でも一回目の訪問を思い出そうとしても、不思議なほど、島の景色も神聖な空気も、本当に何も浮かんでこないのだ。

二回目に久高島を訪ねたのはそれから六年後だ。私は東京に帰り、新しく始めた仕事で

久しぶりに沖縄を訪れた。仕事を終えた後に延泊し、沖縄に住んでいた時に、本当に血の繋がった家族のように親切にあたたかく接してくれた心の姉と一緒に、沖縄本島南部をドライブしていた。南部をあてもなくのドライブだったが、私が唯一行きたかった場所があった。旧知念村、現在の南城市にある世界文化遺産の斎場御嶽（せーふあうたき）だ。

「せーふあ」は「最高位」を、「御嶽」は拝所を意味する。「斎場御嶽」は「最高の拝所」という意味となる。一番奥の三庫理（さんぐーい）にはチョウノハナ（京のはな）という最も格の高い拝所があり、クバの木を伝ってアマミキヨが降臨するという。私は斎場御嶽が琉球王朝時代、沖縄本島で最も神聖な場所とされたのは、三庫理から久高島が拝められたかと思っていたが、実はこのことについては、史書には記述がないらしい。近世になって三庫理の岩壁の一部が崩れて久高島の姿を拝めるようになったが、かつての三庫理は三方を岩壁に囲まれていた。

沖縄本島に住んでいる間、斎場御嶽はよく訪れた。なんとなく気持ちが落ち着く場所だったから。第二次世界大戦時に唯一本土決戦があった沖縄本島では特に中南部の森のほとんどは戦火で焼けてしまったが、唯一昔からの森が残っているのが、斎場御嶽の周辺だ。そのためか、この辺りは中南部では一番の昆虫採集スポットでもあり、入場が有料になる前は、私の周りにもたくさんいた昆虫マニア達が、昼夜を問わず、採集に訪れていた。

姉さんと斎場御嶽に向かったこの日、私達はなかなか目的地に辿り着けなかった。沖縄本島の道なら走り慣れているはずの姉さんがこの日は見事に道に迷っていた。海を見ながらドライブしようと空港近くの比較的新しい海沿いの道を走ったのがいけなかったのか、南部の道をぐるぐる、ぐるぐる。今思い出しても不思議な位、通ったことのないような道を走り、引き返したり、違う道を行ってみたり。何度も斎場御嶽に行ったことのある私でも仰天したさとうきび畑の中の私道（普通は入ってはいけない。なぜか門が開いていた）を抜けるという謎のルートで、やっと目的地の近くに辿り着いたが、なんとここで雨が降り始めた。これは今日は斎場御嶽に行くな、ということかしら？と思いつつ、先にお昼を済ませているうちに天気は嘘のように回復し、私達は斎場御嶽に向かった。

斎場御嶽はいっ訪れても落ち着くし、清々しい気分になる場所だ。この日は七月で、七月といえば沖縄の暑さが一番厳しいとき。この日もくらからするような暑さだったが、斎場御嶽の森の中では心なしか涼しく感じる。

そしてそれは突然に決まった。三庫理で姉さんと並んで久高島を眺めていたとき。どちらからともなく久高島に行こうということになった。呼ばれていないと久高島には行けな

いと教えてくれたのは他ならぬ姉さんで、何と沖縄生まれ、沖縄育ちにもかかわらず、今まで一度も訪れたことがないという。

経験的にこういう時はだいたいの目的地に辿り着ける。神の島に行く船がどこから出ていたのかも私は全く覚えていなかったが、朝の迷走が嘘のように、スムーズに船着き場に辿り着いた私達は今から出る船に乗って夕方に帰ってきてても、私が乗る予定の羽田行きの飛行機にも間に合うことを確認した。

船着き場で待っていると、偶然にも姉さんの知り合いのおじさんが通りかかり、飲み物でも買いな、とお小遣いをくれた。私達ふたりとも立派な大人だけど、そんなことはおじさんはお構いなし。「いらんのにー」とお金を返そうとする姉さんに、強引に千円札をにぎらせて去るおじさん。こんな光景もなんというか、非常に沖縄らしい。とにかく人間関係が濃いのだ。

久高島までは船であつという間だ。高速船で約十五分。船内の椅子に座り、姉さんおしゃべりしているうちに神の島に到着した。

本当に一回目の訪問の記憶が曖昧なので、まるではじめて来る島のようにだと思いつながら、観光案内所まで歩く。島に到着した途端に、浜辺でがけに向かって跪き、うーとーとー(拝むこと)している人もいる。観光案内所で観光ガイド付きの車ツアーは予約していないと乗れないことを知り、あまり時間もないことだと散歩することにした。

ひとしきり浜辺で海を見た後、小さな集落の中を歩いてみた。木陰は涼しいけど、とにかく暑い。犬に吠えられたり、窓を開け放しているの、家の中からテレビの音や会話が聞こえてきたり。他の沖縄の離島と変わらない景色だな、と考えながら歩いていたら、集落内にも小さな御嶽のような場所があった。そこだけ雰囲気が違うように感じるのは先入観のせいだろうか。心なしか気温も低い気がする。よくわからないけど、なんとなく立ち入ってはいけないような気がして、姉さんとふたり、道からお祈りして帰ってきた。

船を待つまでの間、あまりの暑さにへとへとだった私達は、食堂でぜんざいを食べながら一息つくことに。ちなみに沖縄のぜんざいは県外のそれとかなり違う。黒糖で煮た金時豆と煮汁を冷やして器に盛り、数個の白玉とふわふわのカキ氷を乗せたもの……これが、沖縄風「ぜんざい」。

店内でぜんざいのきめの細かい氷をつつきながら、ぼんやりと外を眺めると、スズメバチかアシナガバチかの類が地面にいたらしく(地面にいる時点で弱っていたことが想像できるけど)、観光客の水着姿の若い男女を中心にちょっとした騒ぎになっていた。店内で掃

除機をかけていた店のおかみさんが、出て行って島ぞうり（ビーチサンダル）で踏みつぶし、あつという間に解決していた。島の人はたくましい。

帰りの船にもスムーズに乗れ、帰り道、姉さんは道に迷うことなく、私を空港まで送り届けてくれた。本当に朝のあの迷走はなんだったんだろう。偶然のようでもあり必然のようでもあった二回目の訪問でも、そこまであの島が神聖な場所だと最初は感じなかった。意識して名所をまわらなかったからかな。人々が生活する他の離島と同じような。

でもやっぱり振り返ってみると、あの島は特別で、あの小さな小さな御嶽から感じた、得体の知れない空気、侵しがたい神聖さのようなものは久高島独特ものだ。

沖縄に住むことなど想像もしていなかった昔々、はじめて沖縄を訪れた時に泊まった場所も知念の海辺に建つホテル「サンライズ知念」だった。斎場御嶽にも久高島にも何となく心惹かれるのには、そのことも関係しているのかもしれない。

今でも二度の久高島への訪問を思い返してみるととても不思議な気持ちになる。最初に島を訪れた時には、また再びこの島を訪れると想像もしてなかった。ましてや、二回目の訪問時の自分の姿は。すっかり元気になり、東京で仕事をし、新しい友達もたくさんできて、そしてこんな風にその体験を文章にしているなんて……全く想像もできないことだった。

呼ばれないと訪れることができない神の島に二回も行った意味はなんだったのかと自分なりに考えてみる。今考えれば、最初の訪問は、十分頑張ったからもう色々手放していいんだよ、と神様からお赦しをもらえたのかな、と思う。多少時間はかかったけれど、物事は思ってもみなかった形で解決した。今回島への訪問を文章にしてみても、はじめて気がついたのだが、二回目の訪問の後もたくさんさんの大切な新しい出会いがあった。びっくりするくらい。また時間がたてば、もしかして三回目の訪問の後にも、新たに何をもらったのかわかるのかもしれない。うちなーの神様から。